

び吸入性アレルギーの種類等について、家塵および真菌抗原陽性者の皮内テストによるエンドポイントの差について、統計的考察を行い、地域特異性があるかどうかを検討したので報告した。

36.働く主婦と育児の問題

(第III報)女教師における概況

(至誠会・一三会)

○森井 つた・小谷 愛子・山県小伊志・佐藤椰子枝・清水五百子・浦田とめ子・矢野千鶴子・松野マサヨ・土肥 浩子・岩本由基枝・中川 貞子・笠井 和

私達は先に日本および台湾の至誠会員を対象としてアンケート調査を行ない、職業と家庭、殊に育児を如何にして両立させたかを集計し、育児には開業という態勢が都合のよいこと、母の健康と仕事に対する意欲が大切であり、もちろん夫の理解、周囲の協力の必要なことをふくめ、妊娠、出産、育児でどのくらい仕事を休んだか等について報告した(東女医大誌 43(6),43(9))。

今回は、女性教師、現在現場にあり、子供のある人を対象として同様のアンケート調査を試み、381通の返信を得たので、その集計結果を報告した。

全国に居る一三会員の手を経てアンケートを配布したので、返信率は不明となつたが、公立小学校280、中学校60、高等学校26、養護学級3、養護担当教師7、その他5である。

妊娠、出産、育児で仕事を休んだ期間は、殆どが公務員であるため規定通りの12週が大部分で、夏休みを考慮しての計画産児もあり、6週となつている。至誠会員と同じく条件付両立例が多く、大部分が祖父母に育児をまかせているが、近所の人という場合も田舎では多いようであつた。殆どすべてといえる人数が経済的理由で勤務を続け、子供数は1~2人が多く、経済的理由で子供を制限しているという答も多い。流早死産が多いのではないかと思つていたが、体育、遠足、運動会、水泳等の理由での自然流産は138回ある。これらにつき、東北、関東、関西、富山、九州、東京と地区別に考察した。

37.気管カニューレ抜去困難症の1治験例

(耳鼻咽喉科)

上村 卓也・高山 幹子・○藤多 恒子

心臓手術後の小児におこつた気管カニューレ抜去困難症に対して、フレキシブルのシリコン製 T-tube を使用した気道形成術を行なつたので報告した。

症例は7歳の女兒、フォロー四徴症の術後に肺炎を併

発し、喀痰の分泌が多量のため、1カ月後に気管切開を行なつた。その1カ月後気管口閉鎖を行なつたが、呼吸困難、チアノーゼを来たしたため、経鼻的気管挿管を行なつた。以後3回気管チューブの抜去を試みたが成功しないため、当科を受診した。

当科では再気管切開、および microlaryngosurgery による声門部の粘膜腫脹ならびに癒着部位の切除を2回にわたつて行なつたが、気管カニューレは抜去できなかった。

本例に対してフレキシブルのシリコン製 T-tube 利用による気道再建術を行なつた。まず喉頭截開術を行ない、声帯部のほぼ全長にわたる癒着を剝離した。再癒着を防止するため、輪状軟骨上縁の高さから気管内に T-tube を挿入し、その下端は気切口上縁、上端は仮声帯の高さになるようにした。その後、切開した甲状軟骨および皮膚を縫合し、T-tube の側管のみが前頸部に出るようにした。同時に気管カニューレを抜去した。術後は T-tube の前頸部端に栓をして自然の呼吸を行なわせ、かつ経鼻栄養を行なつた。4週後に全麻下に喉頭展開して声門部を観察しつつ T-tube を前頸部より抜去した。術後10カ月目の現在、呼吸困難もなく元気に通学している。

本例に使用した T-tube は、一定の硬度をもちながらフレキシブルである点が特長である。したがつて1カ月以上の気管内留置後にも皮膚に切開を加えることなく挿入創より抜去できるので、各種の気管狭窄の治療に応用できる方法と考えられた。

〔特別講演〕

乳幼児脳障害の早期診断と治療

教授 福山 幸夫(小児科)

発達途上にある乳幼児の脳は、種々の要因によつて傷害を受けやすい。その結果乳幼児の脳障害は、小児科診療の場面において極めて重要な地位を占めるに至つた。神経細胞の新生・増殖は生後には行なわれなないため、障害はとかく不可逆的なものになりやすい。したがつて臨床医としては、早期診断、早期治療の鉄則にもとることのないよう心掛けるべきである。

演者は、限られた時間内で、次の話題をとりあげようと思う。

1. 点頭てんかんの早期診断と治療。
2. 結節性硬化症の早期診断としての白斑の意義。
3. 筋緊張低下を主訴とする疾患群。
4. 重金属と脳の発達。